

明治の佐伯三青年（三六）

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

（賛助会員・川越市小堤）

藤田 茂吉の死（その一）

国会開設の準備は着々と進められ、七月一日、わが国で最初の衆議院議員の選挙が行われた。衆議院議員選挙法は、帝国憲法及び議院法、その他の附属法令と同時に発令されたが、その規定によれば、各府県を数区に分けおおむね二、三郡を合わせて一選挙区とする小選挙区制を採用した。一区に一人を選出することを通則とし、やむを得ざる場合のみ二名をあげ、総定数を三百人と限定した。そして選挙人資格は、日本臣民の男子年齢満二十五才以上の者、被選挙人は、同上三十才以上の者で、ともに選挙人名簿調製の期日前満一年以上その府県内に於て、直接国税十五円以上を納め、なお引き続きこれを納める者であることを要し、その上、選挙人は名簿調製の期日前、満一年以上その府県内に於て本籍を定め住居し

なお引き続き住居する者たるを要すと定められていた。この最初の総選挙は、外国からも注目されただけあって、政府も干渉することなく、選挙民も爾々として権利を行使し、全国民は、固唾を飲んでその結果を待った。藤田は東京府の第四区から当選した。因に六区に分けられた大分県では、第一区から元田肇・箕浦勝人・朝倉親為・宇佐見春三郎・安藤九華・是恒真楯の六氏であった。

各新聞社は、こぞつてこの結果を報じ、つとめて新議員の政党における所属別の分析を試みたが、はじめてのこととあって困難を極めた。「日本政党発達史」によれば、この間の事情を次のように記している。

—此等の議員中には従来全く政治に関係しなかった人達も少なくなく、従つて当選後は或いは孤立し、或いは三々五々相集まつて小団体を組織した。それ故に此の新議員の所属別を詳らかにすることは頗る困難であるが、当時新聞に記載されたものの中、比較的正確を得たと思われるものをここに転記すれば左の如くである。

中立派 六九名 大同倶楽部 五五名

立憲改進黨	四六名	愛国公党	三五名
保守党	二二名	九州進歩党	二一名
自由党	一六名	自治党	一七名
官史	一八名	不明	二名
合計三百名			

選挙後、自由党系を中心に政党の再編成に向かうが、衆議院の組織が成ると、続いて貴族院令にもとづいて、貴族院議員の互選が行われた。貴族院は、皇族及び公侯爵の有爵者、伯子男爵間に於て公選される代表者と、国家に功勞あり且つ学識ある者の中から特に勅選される者、ならびに府県が多額納税者から選出される代表者によって構成されることになっていたが、去る六月十日の選挙で多額納税議員が決まり、七月十日に前者の互選が行われ、二百五十名貴族院議員が決定した。

矢野は、藤田の当選には早速使いを出して祝ったが、その後の情勢については、ただ無表情に新聞に目を通すだけであった。

八月四日には、旧愛国公党や再興自由党が解散し、七日には九州同志会、十七日には大同倶楽部が解散する。

そして二十五日にはこれら四派の委員が愛宕館に集まって、立憲自由党の新政党編成を目論み、その間中立派の杉浦重剛や芳野世経等は芝の弥生館に懇親会を開いて大成会を組織した。大きくふくれあがった立憲自由党は、この時とばかり、同じ反政府の歩調を取る改進黨に合同を誘ったが、改進黨は、九月一日に臨時党大会を江東中村樓に開き、この合同案を否決した。

矢野はこの政情を見届けてから、ある夜、伊藤邸に枢密院議長の伊藤博文を訪ねた。伊藤自身、選挙後の新議員の動向について、各政党の離合集散に眼を光らせた時だけに、陰の改進黨の領袖ともいふべき矢野の訪問を快く迎えてくれた。が、伊藤は政党の動きで頭が一杯であったのだろう、矢野に笑顔は見せたが、開口一番やはり政治の話であった。

「よう来てくれた矢野君。日本もどうやらここまで国家体制をこぎつけた。祝うべきことだが、これからの政府は大変じゃわい」

矢野は静かに頭を垂れていたが、矢野の顔を見た伊藤には、自然に口に出たのであろう。

「改進黨が自由党と結ばなかっただけでも天の恵みとい

うものじゃ」

矢野はこの言葉を聞いて、この自分がまだ改進黨で動いていると伊藤が考えていることを察し、ここぞとばかりに切りだした。

「伊藤さん。私自身政治のことはすっかり忘れましました。つきましては、今日はお願ひの儀があつてまかり越しました」

矢野は再び丁重に頭を下げた。

「以前からそのことは聞いてきたが、わしに頼みとは少々怖いのが」

伊藤はこう言つて笑つた。

「実はそれがしに宮内省の出仕をおとり計らい願ひとう存じます」

「なに。宮内省」

伊藤は宮内省と聞いて一瞬驚いた様子であつたが、じつと腕を組んで考え込んだ。

「相変らずの知恵者よのう。だが、そこまで政治嫌ひになつたとは思ひもよらなかつた」

伊藤のこの言葉には矢野の心情を察した万感の思ひが込められていた。さすがに超党派の宮内省に入れば、再

び政界に引つ張り出されることはない、伊藤もとつさに考え付いていた。

「今までは随分喧嘩もしたが、大隈の入閣に当たつては世話になつた。おぬしがたつての望みとあらば、一肌ぬがねばなるまいのう」

「お願いいたします」

こうして伊藤は、矢野の懇請を引き受けてくれた。

誰にも相談せず自らの腹を固めた矢野は、報知社も後進に任せ、今度こそ自分の選んだ道を進もうとしたが、その後、関西では有志が大懇親会を開き、自由・改進黨の合同希望を決議したり、十五日には、自由をモットーとし、民権拡張・地方分権・対等外交や政党内閣をスローガンとする立憲自由党が結党式を挙げ、政党性が表面化しつつかつた。

この機に、国会開設を控えて、全国の情報交換の必要性を感じた新聞記者は、全国の記者を東京に集めて、共同新聞倶楽部を設け、各分野も慌ただしい動きを見せ始めた。

そして、十月九日に、この年明治二十三年十一月二十五日をもって帝国議會を召集する詔書が発せられた。こ

の詔書によって国会開設の日取りが正式に決まると、各議院は院の規則の制定に追われ、政府に反対する態度を取ってきた各政党は、この時とばかり、議会の運営を如何にすべきかで裏交渉を始める始末であった。

こんな時に、矢野は待ちに待った伊藤からの呼び出しを受けた。伊藤は上機嫌であったが、少々皮肉った。

「おぬしがむつかしい注文をするので、少々手間取ったわい」

伊藤は頭を手をやっていたが、矢野は地位の注文をつけたわけでもなく、げげんそうな顔をしていた。

「どうやら内定したが、宮内大臣の土方や次官が計りかねてのう、わしも困ったのじゃ」

「ご無理を申しまして——」

「うん——」

伊藤は大きく頷いたが、矢野は伊藤にとってそんなむつかしい問題とは思っていなかった。

伊藤はおもむろに口を開いた。

「わしも宮内省もおぬしの人格は認めるが、かりにもおぬしは全国に知られた野党の立役者じゃ。大臣が計りかねるのも無理はない。宮内省といえは他省と違って、お

上に仕える省である。大臣は叡慮を慮ったのかもしれない。これにはわしも困ってのう」

伊藤はこう言って一日話を区切ると、傍の茶をすすって続けた。

「幸いに、この度わしは貴族院議院の議長の大役に推されていた。そのお礼もあって陛下の前に進んだ時、それとなくおぬしの希望を話して陛下の御内意を伺ったが、そのお許しが出たというわけじゃ。宮内大臣もほっとしていたが、おぬしの話は陛下までわずらわせる」

伊藤は今度は声を出して笑った。

「恐れ多い」

矢野はたかが自分の話が、陛下の叡聞にまで達したと聞かされ、テーブルの上に両手をつき、額をこすりつけていた。そして、大隈入閣の際の覚書の一件といい、今度も再び伊藤の深慮を思い知らされた。

矢野にしてみれば、政党色のない宮内省出仕によって誘いの手も伸びず、完全に政界から足を洗えるという名案を思いついただけである。だが、出仕してみると一室まであてがわれ、一名の属官まで附されて恐縮した。また格式を重んじる宮内省にあって、間もなく勅任式部官

を拜命して、国会開設には皆を驚かせることになる。伊藤の配慮であった。

十一月二十五日、第一回帝国議会在が召集され、衆議院構成の議長・副議長が採決された。議長には自由党の中島信行、副議長には大成会の津田真道が選ばれた。そして二十九日には、陛下が貴族院に親臨せられ、ここに勅語を賜って、帝国議会の開院式が行われた。維新以来、全国民が待ちに待った立憲政治の幕開けであったが、議員達の眼を見張らせたのは、そこに明治天皇に属従し、宮内省の式部官としてお側に侍立する矢野の姿であった。誰しも改進黨の領袖として議院席に在るべきはずの矢野の姿が、式部官として明治天皇のお側に侍立しているのに啞然とした。

勿論このことは、すぐさま巷にも知られ、新聞紙上にも取り上げられる有様であった。ある者は今までの矢野の政治活動を惜しみ、ある者は民権運動の勃興から十有余年、民間大臣とまで称えられた矢野の、精神的後退や変節として非難する者もいたが、矢野は淡々としていた。むしろ、自分自身に忠実に生きる充実感を味わっていた。

一方、藤田は当選以来矢野の心境を察して、再び政治の話は持ち込まなかつた。矢野の去つた改進黨は、藤田や島田等が協議して党運営に当たり、矢野の宮内省出仕はうすうす知っていたが、矢野の姿を目の前にしては、奇異な感慨にうたれた。矢野の性格を一番よく知っている藤田は、それはそれとして矢野の生き様として理解を示したが、党運営は多忙を極めた。

十二月六日には、立憲国家慣例の山県首相による施政方針が行われると、いよいよ議会の活躍の場は政府の予算編成へと移っていた。雌伏十余年、政府に屈伏を強いられてきた各政党は、この時とばかり政府の攻撃を始め、論議も口頭だけではらちがあかなかつた。言論攻撃だけでは政府に対する効果がないと知つた政党は、財政問題を楯にとり、予算の変更を政府に求めるといふ強硬手段を考へた。そしてこの計画には、各野党の連携が必要であつた。この予算委員会は、委員長に大江卓を推し、改進黨からは藤田自ら尾崎や阿部と共に理事として入り、予算委員六十三名中、大半を自由・改進黨で占めることにした。こうなると藤田は、率先して党議をまとめる一方、連日自由党と共闘の折衝に飛び廻り、薩長政府

の對抗に情熱を燃やしていたが、日毎に疲労を覚え始めていた。藤田は単なる心労と多忙からくる疲れとばかり気にもとめなかったが、藤田はこの頃より、しだいに肺患に冒されつつあった。

藤田等の予算委員会は、予算の査定方針を立てて調査をすすめ、政府の歳入総額八千三百余万円に対して、八百八十余万円の大削減を申し入れた。勿論・大蔵大臣松方正義は、この査定案に異議を唱え、議会の反省を求めたが、野党の数で勝る委員会は一歩も退かなかつた。本会議では、政府筋の議員から度々動議が出されたが、その度に否決されて政府も万策つきたかに見えたが、最後の緊急動議として「憲法第六十七条に規定しある三個の歳出につき、本院に於て廃除削減せんと意志を定めしものは、本院確定議以前政府の同意を求めんとす」

という動議が天野若円の名で提出された。藤田等は、いかなる動議も否決されるものとたかをくくっていたがいざ採決となると、これが一〇八に対する一三八の多数によって可決され、野党は愕然とした。

こうなると、政府の議員買収説があらさまに吹聴され、院内は騒然となり、再び巷では壮士が横行する有様

であった。

藤田は連日島田等と対策を練り、質問状を政府に提出して回答を求めたが、なしのつぶてであった。

この間政府は、六百五十余万円の歳出削減という修正案を作り、自由党議員の切り崩しにかかった。自由党議員の中には、第一回の議会から收拾のつかないもめごとも得策ではないと判断し、主に土佐派議員が、特別委員会を設けて、この修正案に賛同することで予算案を成立させた。これに憤慨した中江兆民は、直ちに辞表を提出して院外に去り、最初から雲行きのあやしい議会開設であった。

その間、衆貴両院の規則が定められたり、全院の委員長を選挙して衆議院では改進黨の島田三郎が当選したり開院当初の議会は、構成に運営に手探りの状態であった。

議会は十二月二十五日に休会に入り、明けて明治二十四年の新年を迎える。藤田は新年の挨拶もそこそこに休養を心掛け、さわやかな新年を迎えた矢野は、宮中の正月行事が終わってから家族水入らずの正月を祝った。宮内官となった矢野は、例年のような挨拶回りは避けたが

恩師の福沢と大隈、世話になった枢密院議長伊藤には、夜のうちに年賀を済ませた。福沢や大隈は、矢野の心情を察してか生臭い政治の話は出なかったが、伊藤に「大分居心地がいいと見えるのう。血色までよくなった」と、冷やかされた時は、さすがの矢野も頭が上がらなかつた。

それでも、報知社の幹部が来訪した時は、注意を怠らなかつた。

「議会の開会をご覧のとおりじゃ。不慣れな議会運営はしばらく混乱するが、紙上の政論は再び壯士達を横行させる。政論が不必要だとは言わぬが、政論新聞の愚は避けねばならぬ。新聞は読者あつての新聞であることを忘れるな。世相には常に眼を光らせておけ」

矢野は再び政論新聞に逆戻りする懸念を戒めたが、弟の小栗貞雄や三木善八は神妙に聞いていた。

矢野の休日をはかって、藤田も久しぶりに家族連れで来訪した。

藤田はつとめて政治の話は避けようとしていたが、矢野の方から誘い水をかけた。

「茂吉。予算案では頑張つたのう。あれでいいんじゃない。

伊藤さんも嘆いておられた。あれじゃ山県がためとな」「数の上ではわかりきっていることだが、政府もなかなかしぶとい」

「なにしろ策士が揃っているからな。理屈では分かっているても、薩長は権力を離さぬわい。これを奪い取るには根気が要る。その時こそ議会在正常に働くことになる。

薩長が嫌気をさして投げ出すまで、繰り返しじゃわい」

「かといって、手をゆるめるわけにはいかぬ。国会開設の意義を全うせねばならぬ。これがわし等の任務じゃ」藤田はこう言いながら時々咳き込んでいた。

「気になるのうその咳は。ただの風邪ではない。ここかもしれないぬぞ。早く医者にみせろ」

矢野は弟分の藤田とあつて、遠慮なく胸を押さえて肺患ではないかと忠告した。

藤田は大きく頷いていた。

伊藤が矢野に嘆いた通り、第一議会閉会の後、山県首相は辞表を奉呈した。はじめての議会対策で、反政府の数で勝る新政党議員の猛反撃にあつた山県は、なすすべを知らず、憲政運営の至難であることを悟り、責任を取る形で内閣総理大臣を辞職した。民党ではまずは政府攻

撃成功と快哉を叫んだが、国会開設といつても、まだ首相を選ぶルールがなかった。巷でも薩長の権力たらい廻しでは同じことの繰り返しだと非難はするが、選び方を知らなかった。矢野が大隈入閣に際して、伊藤に全国でもっとも支持のある政党の総理が総理大臣をつとめることを約束させようとしたのもこのことである。勿論伊藤はこの覚書をもみ消したが政党制度の固定化しないこの時代では、まだ尚早であつたことはいなめない。

わが国では、維新以来元老という特権階級が存在し、この元老会議が総理大臣の人選にも大きな発言力を持っていた。しかし、この元老達の思考も薩長権力の外に出ないものである。山県の次は、薩長勢力の均衡を保つために薩人でなければならぬ。元老達は山県の後任に黒田清隆・西郷従道を推したが固辞され、仕方なく大蔵大臣の松方正義を推すことにした。松方が親任されたのは五月六日で、他の閣僚は揃って留任することになったところが松方内閣成立後五日にして大事件が起こったいわゆる大津事変である。

観光のため来日したロシア皇太子ニコライ殿下を、護衛中の津田三蔵巡査が襲つて傷つけたというのである。

幸いにして、一行の車夫の機転により大事には至らず、国際問題までには発展しなかつたが、政府は滋賀県知事沖 守国・同警部齋部秋夫の職を免じ、内務大臣西郷従道及び外務大臣青木周藏を更迭してロシア国に謝意を表明した。

この機会に松方は内閣を改造し、外務大臣に榎本武揚内務大臣に品川弥二郎を起用した。尚特筆すべきは、時の司法大臣山田顕義は、津田の罪状について、大ロシアに気兼ねし皇室に対する犯罪と同等に扱おうとして司法部に干渉を試みたが、大審院長小島惟憲は堅く司法権の独立を堅持して譲らず、わが国の法律に従い、謀殺未遂として無期徒刑の判決を下して日本司法権の面目を保つた。山田司法大臣が辞職せざるを得なかつたのはいうまでもないが、前途多難の松方内閣の門出であつた。矢野はその後、皇族令取調委員にあげられ、更に爵位規定取調委員を兼ねることになったが、政争のわずらわしさから開放された矢野にとっては、毎日が日本晴れのような悠々自適の日々であつた。

(この項つづく)